

博士学位論文審査等報告書

審査委員 主査 長野 和雄

副査 檜谷美恵子

副査 山川 肇

副査 松原 斎樹

1 氏 名

羽原 康成

2 学位の種類

博士（学術）

3 学位授与の要件

京都府立大学学位規程第3条第3項該当

4 学位論文題目

環境配慮的な社会を目指す活動による意識と行動の変化に関する研究
-木を使ったものづくり活動が建築・住居系学生と、活動地域の住民に与える影響-

5 学位論文の要旨及び審査結果の要旨

【学位論文の要旨】

別紙に記載

【論文目録】

別紙に記載

【審査結果の要旨】

本論文は、「木のものづくり活動（WCA）」が参加者に与える影響と、参加者の活動に対する意識の特性や、その教育活動を受け入れる活動地域の住民意識の実態を明らかにすることを目的としている。

本論文は5章からなる。

第1章では、人間生活に対する自然環境の役割や、環境配慮的なボランティア活動や教育活動に関する既往研究をレビューし、本研究の位置づけと目的を整理している。

第2章では、活動地域（京都府南丹市美山町大野区）でのWCAの参加経験が、意識と行動に及ぼす影響を明らかにするため、アンケート調査及び長期に渡る参与観察の結果を報告している。

アンケート調査結果を、相関分析とMann-Whitney U testにより分析し、参与観察と合わせて考察して、以下の知見を得ている。①回答者の90%以上が参加して良かったと回答しており、満足感が高いこと。②参加者は、住民と交流することで、人や地域に貢献する思いが高まっていること。③参加者は、WCAによって地域や森林保全への貢献意識を高めると共に、環境に配慮したものづくりによって地球環境保全への貢献意識を高めていること。④WCAによって人や地域への貢献意識が高まった参加者と、活動を通じて設計やプレゼンテーションの技術を高めようとする参加者は、活動の継続意識を高めていること。他方、WCAの満足感が高くても、活動を継続する意識が高まるとは限らない。その理由は、参加目的が、設計や制作、友人とのつながりである場合、その目的を達成した事で満足し、活動を継続する理由を失うためと考察している。⑤参加者の、サークルの運営を持続させるために自覚的に努力する意識はあまり高くないこと。⑥本研究の参加者のWCAに対する意識の特徴は、「木のものづくり」と「地域住民とのふれあい」の満足感の高さであった。

第3章では、木のものづくり活動が、参加者に与えた影響の個人差に着目している。個人差の特徴を明らかにする事で、個人の特性に配慮した教育的手法により参加者への教育効果が高まる事が期待される。

主に得られた知見を以下に示す。①WCAから得た効果について主成分分析を行い、「地域貢献意識」と「森林保全意識」、「木のものづくり」の3主成分を抽出し、更に、クラスター分析によって参加者を『地域貢献群』と『デザイン群』、『中庸群』、『環境保全群』の4群に分類している。②『地域貢献群』は、様々な実体験をポジティブな姿勢で受け止め、地域への貢献や、環境に配慮する意識を高めていた。③『デザイン群』は、「ホームステイ」などの地域交流を、制作のための調査として客観的に捉える傾向があること。④『中庸群』は、控えめで偏りのない姿勢の参加者が多いが、活動の実践による実体験から教訓を得て、生かそうとする意欲がみられること。⑤『環境保全群』は、WCAの取り組み以上の森林保全や林業に関わるプログラムを求めていたと考えられた。

第4章では、地域住民の意識に着目し、WCAが住民に与えた影響を明らかにするために行ったアンケート調査結果を、相関分析とMann-Whitney U testにより分析し、参与観察と合わせて考察している。

主に得られた知見を以下に示す。①大学生が、地域での活動や、地域住民と交流する機会を増やす事は、地域住民のWCAに対する満足感を高めること。②地域住民は参加者からのヒアリングによって、居住地に対する関心を高めていたが、このことは、地域おこしや地域の持続可能性を考える上でも重要であること。③地域おこしに関心

の高い住民は、他の住民が地域おこしへの関心を高める事を期待して、参加学生との交流を深めることに関心を持っていること。

第5章は総合考察である。参加者はWCAによって、地域や地球環境保全に貢献する意識を高め、地域おこしにも貢献した事を実感する事で、教育効果が高まる可能性を示している。また、限界集落でのWCAは、地域を持続させるための貢献も重要であるが、参加者は活動を自立的に運営して持続させる意識が弱く、その改善が課題であることを見いだしている。一方で、一部の住民は、WCAによって他の住民が地域おこしの関心を高める事を期待している。また、活動の認知度が高まり、交流が深まることによって、活動への要望が多様化している事を見いだしている。

WCAに対する参加者の満足度が高い理由は、参加目的（友人の獲得や能力の向上等）が達成された事以外にも、当初は目的でなかったこと（自然に触れる事、住民との交流、環境保全の学び等）によって満足感を高めていたためとしている。また、活動による地域貢献の実感が、活動の継続意識や、さらなる地域貢献の意識を高めるとしている。

本研究は、WCA参加者と住民との交流は、参加者が人や地域のために行うデザインを学ぶ機会となり、活動地域の住民に環境保全意識を普及させる可能性を示している。そして、WCAが、環境配慮的な生活の実現に貢献する人材を育成する可能性を示している。

本論文は、長期間の参与観察とアンケート調査によって木のものづくり活動が、建築・住居系学生と、活動地域住民に与える影響を明らかにしており、環境配慮的な生活と社会の実現に向けてたいへんに有意義な知見を得ている。

以上より、本論文は博士学位論文の要件を十分に満たすものであると評価できる。

6 最終試験の結果の要旨

本論文の内容は公開発表会（2021年2月17日（水） 午後2時45分～3時45分、稲盛記念会館103講義室）で発表された。本人の発表を受けて、参加者から活発な質問や意見が述べられた。その主なものは、調査票の配布方法に関する質問、分類された参加学生の変化の可能性に関する質問、大学教育とサークル活動の目標の違いに関する質問、デザイン群の評価に関する質問、地域住民に受け入れられるまでの経緯に関する質問などであった。申請者は、それぞれの質問に的確に回答し、有意義な討論が行われた。

また、公開発表会とは別に、主査・副査による審査会を行ったが、特に問題となる点はなく、博士論文として十分な水準の研究内容であることが確認された。

以上、最終試験の結果は、公開発表会および審査会での結果を踏まえ、審査委員全員一致で合格と判断した。

以上